

『Bチク♥コンプレックス』

著：森本あき

ill：北沢きょう

「俺も、責任を感じてるから、いろいろな薬や道具を考えてみたけど。まずは、朔の乳首がどれほど感じるのか、それをたしかめれないことには始まらない、って気づいた。朔だって、何回もやり方を変えるより、一発で治ったほうがいいだろ」

「え、一発で治るの!？」

もしかして、今年の夏には海に行けたりする!？」

「だーかーらー」

航大は、ふう、とため息をついた。

「そのために、俺にたしかめさせろ、って言ってんだよ。で、治療法決めて、それを試す。そのどこに、反対する要素があるんだ」

たしかに、航大の言ってることは正しい。朔だって、それが一番いいとわかっている。でも。

「触る…んだよね…？」

朔は、なんとなく、航大から目をそらす。

「俺はエスパーか？」

航大が、あきれたような声を出した。

「触ないと、わかんねえだろ。触診って、大事なんだぞ」

うん、そうだろうね。触診を我慢すれば治るんだったら、朔だって喜んでやってもらいたい。

だけど。

「なんだよ」

航大が朔をのぞき込む。

「口にしないと、考えてることなんて伝わんねえぞ。こんなにシグナルを出してるのに、わかってくれないなんて！ っ、電波なことを言う女か、おまえは」

「航大は、ぱっさり切り捨てそうだね」

めんどくせえ、うぜえ、消えろ、とひどいことを並べたてるだろう。実際、そんな場面を見たことがある。子供心にも、それは言いすぎなんじゃあ、と、相手が気の毒になった。

「ごまかすな」

航大がじっと朔の目を見つめた。

「言っとくが、俺は朔よりも何倍も鋭いぞ。なんで、どのくらい感じるかの触診がいやなのか、理由を述べろ。内容によっては、考えなくもない」

ああ、追いつめられちゃった。

朔はぎゅっと唇を噛む。

鋭いなら、察してくれてもいいのに。感じるって意味を、もっと深く考えてくれてもいいのに。

朔は、ぐるり、と首を回した。緊張しているとき、こうやると、ちょっとは気持ち楽になる。

「ぼくはね、乳首が、ものすごく、感じるの」

ひとつひとつ、言葉をはっきりと発音した。

「だから、困ってんだろ。何をいまさら」

航大が不思議そうに首をかしげる。

「だからね、感じるってことはつまり、生理的反応として…」

ああ、ホント言いたくない。このまま黙って、逃げたい。

でも、一生、海にもプールにも行けないなんて、ごめんだ。

「勃起(ぼっき)するの」

朔は、がくん、とうなだれた。頬が熱くなって、それが耳まで広がる。たぶん、そこら中全部が真っ赤になっているだろう。

こんなこと、口にしたくなかった。航大に打ち明けたくなかった。

乳首を触られたら、すぐに勃(た)つ。

そんな、ものすごくプライベートなことを、だれにも教えたくなかった。

「だから？」

あまりにも予想外のリアクションに、朔は思わず、ぱつと顔を上げた。航大は、わけがわかんねえ、みたいな表情で、首をかしげている。

「そこまでひどいから、治してえんだろ？ 男が感じたら、チンコが勃つ。そんなの、常識じゃねえか」

「チチチチ、チンコとか…」

朔は、あわあわ、となった。

乳首の件があるから、朔はものすごく下ネタが苦手だ。そういう話になると、そっとその場を立ち去ることになっている。そんな直接的な表現、しばらく耳にしていない。

うわあ、ものすごく恥ずかしい！

「おまえ、いくつだよ」

航大が、ぷつと吹き出す。

「十八歳」

「いや、別に答えを求めているわけじゃないから」

航大はそう言いつつも、遠い目になった。

「十八かあ…。まだ、夢も希望もあつたな」

「いまはないの？」

さっき言っていたのは、教授になって、お金ががっぼがっぼ、だっけ？

「未来はすべての可能性で満ちている、という意味では、ない。決めた方向に突っ走って、何かをなしとげてみせる、ということなら、ある」

うん、やっぱり、こういう真面目な話をすると、かっこいい。航大がたまに落とす、こういう言葉を逃したくなくて。一時期、ずっとべったりしていた。

「いま現在の目標は、朔の治療。朔が、チンコ勃つのが恥ずかしい、みたいな、バカらしい理由で拒否してるのがわかった以上、無理やりやるから」

「バカらしくないよ！」

いくら航大が医者とはいえ、ずっと昔から知っている相手に、勃つたところを見せるのは抵抗がある。

だからといって、まったく知らない相手には、もっともっと抵抗がある。

あー、もー、どうすればいいの!?

「あのな、チンコが勃つのはすばらしいことだぞ。うち、ED相談もやってるが、年間、どれだけの患者が来ると思ってる。チンコなめんな。あ、なめる、って、口でなめる、とかじゃないからな」

にやっと笑う航大は、完全にオヤジっぽい。え、こんな人だったっけ？

「まあ、とにかくだ。たまの休みに家に帰れて、本来ならぐっすり寝たいところを、朔のために時間を割いてるんだ。どっちかにしろ。俺に治療されるか、されないか。なんか、説得するのもめんどくさくなってきたから、その乳首のままではければ、玄関あつちな」指さされなくても、玄関からの仕切りがないんだから、丸見えだ。

いや、そうじゃなくて。そんな、どうでもいいことはおいといて。

これは、サジを投げられた、ってこと？

逃げたいな、と、何度か思った。治療なんてしなくてもいいんじゃない、と。

でも、実際、そうしてみると、これが最後のチャンスな気がして。

これを逃すと、もう、だれにも相談できなそう。

乳首がものすごく感じる。

朔のそんな体質を知ってくれてる人、たぶん、航大だけで。

朔は、玄関と航大に、何度か視線を往復させて、観念することにした。

恥ずかしいとか言ってもらえない。どこかで、うっかり、乳首に触られて、公衆の面前で勃起するほうが、よっぽどいやだ。

「…します」

「は？」

航大が、わざとらしく、耳に手を当てた。ここにとどまっていることが答えだとわかっているくせに。

ホント、性格が悪い。

「お願いします！」

朔は叫ぶ。

「ぼくの乳首、治してください！」

本文 p77～84 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>